

研究班紹介

第4班 水辺の生活環境史

安室 知（非文字資料研究センター研究員／研究班代表）

本共同研究は、多くの人が行き交い都市として発展するところが見られる一方で、低湿で塩害を受けやすいがため遅れた農業地とされてきた大河川の河口部に広がる汽水域に注目し、そうした水辺環境を生活の場とする人々の生活文化について環境史の視点から究明することを目的とする。同時に、非文字資料の研究手法として、オーラルヒストリーおよび生活環境史を開拓する。具体的には、以下に示す2つのテーマから上記の問題に迫ることとする。

①水上生活者の歴史的変容

江戸時代、日本列島には陸に家を持たずに水上で暮らす「家船^{えぶね}」という生活形態があった。近代に入っても、さまざまにその様態を変えながら水上生活者は各地に存在した。しかし、近現代における水上生活者に関する研究はほとんど進んでいないのが現状である。今その痕跡は歴史に埋もれようとしており、その記録化は緊急性を持つ。

具体的な研究対象地として、北九州の洞海湾を取りあげ、八幡製鉄所の発展に伴う石炭輸送の担い手として登場した水上生活者の歴史的な推移と、洞海湾の環境・景観の変化を重ねて追究する。また、そうした水上生活の変容と消滅のプロセスは、日本における近代化の歴史とその問題点を写し出す鏡でもある。その意味では、本研究は水上生活者を通して日本の近代化を問い直すことになる。

なお、現地調査においては、残り少ない水上生活体験者へのインタビューとともに近代に撮影された写真・映像資料の収集を通して、オーラルヒストリーの手法による水上生活の記録化とその分析をおこなう。

②汽水域の民俗文化

かつて日本常民文化研究所の河岡武春は、日本海沿岸

にある潟湖周辺の暮らしぶりに着目し「低湿地文化」を発想した。その検証は未完のまま終わったが、低湿地文化のあり方として高い複合生業への志向性を暗示した。潟湖周辺の環境は、海と陸の接点となる汽水域（海水と淡水の入り混じるところ）という特徴があり、じつは河岡のいう低湿地文化とは汽水文化の一面に過ぎないのでないかとも考えられる。

四方を海に囲まれる日本列島の場合、河口部や潟湖・内湖といった沿岸環境の多くは汽水域となるが、そこはたとえば魚類の生息環境としてみた場合、淡水魚とともに海水魚も生息可能な生物多様性の高い空間である。そうした自然的特徴を背景に、汽水域では独特な漁労技術や低湿地農耕が発達する。さらには、歴史的に見て、そこは海から河川への荷の積み替えがなされるなど交通の要地となる。また、そこは市や行商といった商業活動も盛んになり、港町のように都市化する場合もみられる。そのため、当然、人や物の行き来に伴い、噂や世間話といった情報の集積地ともなっていた。こうした個々の文化要素を繋ぎ合わせることで、河岡の低湿地文化論を批判的に継承し、新たな視点に立った生活環境史研究として「汽水文化」を提唱する。



写真1 筑後川下流のクリーク（福岡県柳川市）